

日本の名作名文ハイライト

吾輩は猫である

夏目漱石

朗読 wis

出所 八声を便りにVオーディオブック
(DL-MARKET)

http://www.dlmarket.jp/default.php/manufacturers_id/1757/sort/6d

teabreak 編

吾輩は猫である

夏目漱石

●第二章最終部分

―三毛子亡くなる

こう考えると急に三人の談話が面白くなくなったので、三毛子の様子でも見て来ようかと二弦琴の御師匠さんの庭口へ回る。門松注目飾りはすでに取り払われて正月も早や十日となったが、うららかな春日は一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度に照らして、十坪に足らぬ庭の面も元日の曙光を受けた時より鮮かな活気を呈している。椽側に座蒲団が一つあって人影も見えず、障子も立て切つてあるのは御師匠さんは湯にでも行ったのか知らん。御師匠さんは留守でも構わんが、三毛子は少しは宜い方か、それが気掛りである。ひっそりして人の気合もしないから、泥足のまま椽側へ上つて座蒲団の真中へ寝転ろんで見るといい心持ちだ。ついうとうととして、三毛子の事も忘れてうたた寝をしていると、急に障子のうちで人声がする。

「御苦労だった。できたかえ」御師匠さんはやはり留守ではなかったのだ。

「はい遅くなりまして、仏師屋へ参りましたらちようどでき上がったところだと申しまして」「どれお見せなさい。ああ奇麗にできた、これで三毛も浮かばれましょう。金は剥げる事はあるまいね」「ええ念を押しましたら上等を使ったからこれなら人間の位牌よりも持

つと申しておりました。……それから猫誉信女の誉の字は崩した方が
かつこうがいいから少し画を易えたと申しました」「どれどれ早速
御仏壇へ上げて御線香でもあげましょう」

三毛子は、どうかしたのかな、何だか様子が変だと蒲団の上へ立ち
上る。チーン南無猫誉信女、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と御師匠さん
の声をする。

「御前も回向をしておやりなさい」

チーン南無猫誉信女南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と今度は下女の声
がする。我輩は急に動悸がして来た。座蒲団の上に立ったまま、木彫
の猫のように眼も動かさない。

「ほんとに残念な事を致しましたね。始めはちよいと風邪を引いた
んでございましょうがねえ」「甘木さんが薬でも下さると、よかつ
たかも知れないよ」「一体あの甘木さんが悪うございますよ、あん
まり三毛を馬鹿にし過ぎますあね」「そう人様の事を悪くいうもの
ではない。これも寿命だから」

三毛子も甘木先生に診察して貰ったものと見える。

「つまるところ表通りの教師のうちの野良猫が無暗に誘い出した
からだ、わたしは思うよ」「ええあの畜生が三毛のかたきでござ
いますよ」

少し弁解したかったが、ここが我慢のしどころと唾を呑んで聞いている。